

景観に配慮し、調和のとれた棚田の整備・保全（岐阜県恵那市）

Improvement and Conservation of Terrace Paddy Field Considering Landscape in Sakaori, Ena City

岐阜県恵那市役所農業振興課 西尾好則

1. はじめに

恵那市は、平成16年10月25日の1市4町1村が合併し、人口5万7千人の都市として、新たな恵那市が誕生しました。

恵那市は岐阜県の南東に位置し、名古屋から約1時間ほどの距離にあり、中央自動車道恵那インターチェンジより中部・関西経済圏と結ばれています。また、豊かな自然に囲まれ、ダム湖が多く観光資源が豊富であるとともに、中山道・岩村城をはじめとする歴史・文化の史跡など地域資源も市内各地に点在し、これらを活用した都市と農村の交流を図り、「人・地域・自然が調和した交流都市」を目指しています。

貴重な農村景観を残し、次の世代へつなげるまちづくりの取り組みとして、「坂折棚田」の整備と保全について紹介します。

2. 恵那市坂折地区の棚田に関する整備保全構想の経緯

坂折地区で、農用地総合整備事業による区画整理の地元説明が開催されたのは、平成6年度のことです。平成7年度には地域営農者の仮同意を含めた事業の具体化が図られ、平成8年度には地区計画の樹立申請、国による事業実施方針がなされ、坂折地区が整備の対象になりました。

当地区の農地の多くは傾斜地で、石積棚田により構成されており、この棚田の整備・保全をめぐる議論されるなか、恵那市教育委員会では、平成9・10年度に京都大学の金田章裕教授の指導を受け、水田の現況とそれに関わる歴史・民族史料を調査し、記録の保存を行いました。また、信州大学の木村和弘教授の指導により、坂折地区の石積棚田の荒廃化とその対応策についての研究も行われました。

こうした中、坂折地区全体を対象として、事業の具体的な実施計画を行う上で必要な整備方法や保全方法など、学識経験者のアドバイスや全国的な事例を参考に検討を行うため、平成11年度に早稲田大学の中島峰広教授を委員長に選任し、地元農家、自治会、学識経験者からなる「恵那市坂折地区の棚田整備・保全構想検討会」を設置しました。

3. 坂折地区の棚田の整備・保全構想

検討会では、金田教授による詳細な調査結果から、坂折地区の石積・耕作放棄地・水利などの現状の説明が行われました。主な概要は次のとおりです。

坂折棚田は標高410m～610m付近で東向きに作られた石積の棚田で、面積14.2ha、枚

数 468 枚、所有農家 35 戸（不在農家 4 戸）傾斜 1/4～1/7 の急傾斜、区画の大きさは、平均約 3 a で急傾斜地の棚田としては比較的大きな面積である。

また、明治初期にはほぼ現在の形に近い棚田が形成され、黒鍬と呼ばれる専門の石工によって積まれた石積みも多く分布している。特徴としては、山側からの冷たい湧水（清水）の水温調節のため、取水口の「アト口」や水温を上げるための「手あぜ」など、農家の知恵がいたるところに生かされている。

その他、農業機械の導入が困難となっている未整備の農作業道の現状、耕作条件の悪さから後継者不足となり、耕作放棄地が拡大している状況などが報告され、検討すべき課題が明らかにされました。

検討会では、地域の意向を尊重した構想を策定するため、棚田所有者に対し「恵那市坂折地区の棚田に関する整備・保全構想に関する意向調査」を実施し、この意向調査により、いくつかの手法を組み合わせ、農家の意向を基本にした 4 つのゾーニングを提言しました。

区画整理を行い、機械化による農業の振興を図るエリア

石積み棚田を残し、農道等を整備し農作業の安全性の向上・営農の継続を図るエリア
当面は現状のまま、営農の継続を図るエリア

植林等農業以外の土地利用を図るエリア

この検討会の「坂折棚田」整備についての検討の最中、農林水産省の「日本の棚田百選」に認定され、一層の注目を浴びることになり、坂折地区活性化に向けた取り組みや保存組織の立ち上げなど、ソフト面での取り組みも含めて協議されることになりました。

岐阜県で創設された「棚田地域水と土保全基金事業」等の行政支援の取り組みや地元小学校・農業高校による農業体験学習の取り組みも行われることになりました。

平成 12 年 3 月に「恵那市坂折棚田に関する整備・保全構想」が答申され、棚田地域の調和のとれた整備及び保全を行う、全国では数少ない棚田地域の区画整理事業が行われることになりました。

その後、平成 15 年 9 月に恵那市において「全国棚田（千枚田）サミット」が開催され、営農の継続と保全をテーマに坂折棚田の整備・保全の両立を全国に紹介しました。